2025－26年度国際ロータリー2580地区　地区大会

2026年2月26日(木)ホテルニューオータニにて、2025－26年度国際ロータリー2580地区の地区大会が開かれました。

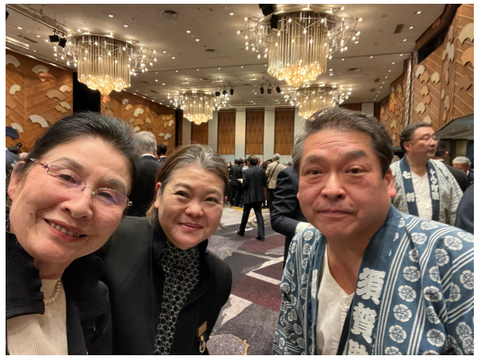
本会議での会員

クラブ紹介

台北東海RCの方々と

水野正人パストガバナーと

佐久田綾子浦添RC会長と



公共イメージ向上委員会　：　委員長　山本会員、副委員長　髙木会員、委員　長尾会員、里見会員、加古会員

Rotary Club of Tokyo Ikebukuro Toshima -East

Rotary 東京池袋豊島東ロータリークラブ　第 25 回例会　2026/3/5　3107回

Weekly Report

会長：榊原一久　幹事：佐藤美枝子　RI会長：フランチェスコ・アレッツォ　第2580地区ガバナー：中川雅雄

四字熟語でロータリー 無常迅速 （むじょうじんそく）	人生はあっという間ということです。今日出来ることを明日に延ばし、面倒なことは先延ばしにしています。一瞬一瞬を大切にし、無駄に過ごしてはいけません。ロータリーの一年間もあっという間に終わるので、例会が充実したものでなければなりません。（小泉博明）

本日の例会

3月5日(木)12:30～13:30
卓　話:「池袋から全国へ」
～この街に与えてもらったバトンを次の時代へ渡す～
卓話者: 株式会社サンシャイニー代表取締役
宮坂庸之氏

次回の例会

3月12日(木)12:30～13:30
卓 話:南雲史成様 紹介者:鈴木孝雄会員

会長報告

次回の例会2月26日(木)は、2580地区大会に振り替えとなっております。ホテルニューオータニでの開催となります。出席される方は、13時00分点鐘となりますので、よろしくお願いいたします。

幹事報告

1　地区大会のお知らせと確認
2　事務局不在のため、会員の協力のお願い。

2月19日　例会報告

司　　会	高木会員
開会点鐘	榊原会長
ロータリーソング	
ソングリーダー	細田会員
会員総数	28名
出席規定適用者数	22名
本日の出席者総数	21名
〃　免除者出席数	5名
本日の出席率	77.77%
ゲスト･ビジター	なし

3月
受　付：吉田秀得会員　石川宜司会員　里見雅行会員
司　会：里見雅行会員　ニコニコ：
写　真：横山晴夫会員　ソングリーダー：宮部一弘会員

ニコニコ

鈴木会員　榊原会長が発行された週報を拝見しました。立派な出来栄えでびっくりしましたのでニコニコします。。
本日の合計額: 5,000円
今年度ニコニコ累計額:304,250　円

3月例会SAA担当

司会	里見雅行会員
写真	横山晴夫会員
ソングリーダー	宮部一弘会員

3月のお祝い

会員誕生日	横山晴夫会員
	小代順治会員

第47回バギオ訪問

第47回バギオ訪問が、2026年2月11日(水)～15日(日)の 4泊5日の日程で実施され、東京池袋豊島東ロータリークラブからは横山会員が参加され、例会で報告をいただきました。

地区RYLAセミナー

2月27日～3月1日(2泊3日)、横浜市にある「上郷・森の家」にて地区RYLA(ロータリー青少年指導者養成プログラム)セミナーが開催された。今回初めて地区RYLA委員として参加し、未来を担う若い世代が持つ可能性の大きさと、ロータリアンとして若い世代に果しえる役割の重さを改めて実感した。

参加者は、テーマ「What for,RYLA(何のため？)」のもとで、講演を聴き、3チームに分かれ、初対面同士でありながら、課題に向き合う姿勢が真剣で、互いに意見を尊重しつつ、議論を深め、課題解決に向けて合意形成を進めていく姿が素晴らしかった(参加者23名)。寝食を共にし、互いの価値観の相違を受容し、チームとして結論を導いてく過程が重要である。そして、参加者一人ひとりが未来の地域社会、ひいては国際社会を担うリーダーとしての自覚と覚悟を持ったと感じた。

リーダーシップとは、必ずしも上から強く引っ張る力ではない、仲間の声を傾聴し、他者の潜在的な能力(capability)を引き出すことが重要である。また、カウウセラーが、参加者の主体性を重んじ、敢えて指導せずに、問いを投げかけることで深い学びがあったと思う。

RYLAとは、若者の成長だけではなく、ロータリアンにとっても学び直しの場であり、大きな刺激となった。これを契機に、次世代の育成に寄り添い、ロータリーの精神を未来へと繋いでいきたい。

(地区RYLA委員 小泉博明)

Rotary Club of Tokyo Ikebukuro Toshima -East

2月19日卓話

会員卓話「老いの価値と尊厳」

卓話者　小泉博明会員

日本は全人口の25%を超える超高齢社会となり、年金、医療、福祉など早急に解決すべき経済的な課題が山積している。しかし、「老い」の意味や重み、あるいは価値について考察することも肝要である。「老い」は老衰、老残、老醜に代表されるように、死への近さが、負へのイメージを増幅させる。しかし、老成、老熟、老実など「老い」を積極的に生かして、良く生きるための老年の知恵や経験という肯定的な成語がある。

高齢者一人ひとりの永い経験の蓄積の上に構築され、自在に使いこなせる、老年の知恵を発掘し、その価値を見出さなければならない。近代化の中で忘却された、古い時代の「老い」の思想、文化について再発掘し、一人ひとりの高齢者から醸造される「老い」の豊かさ、歳をとって初めて分かる人生の楽しみについて自ら問う姿勢が必要である。

江戸時代は「老い入れ」と言い、若さよりも老いに価値を置く文化であった。人生の前半よりも後半に幸福があると考え、楽しみこそ老後にとっておき、楽な老いを迎えることを目標とした。井原西鶴の『日本永代蔵』に、貝原益軒の『養生訓』に、九幸老人と自ら称した蘭学者杉田玄白に、その思想を読み取ることができる。

老いとは、脆弱になることではなく、役割が変わることである。そして、その変化を受容すると、もっと自由自在に、もっと豊かに泰然自若に生きることができるのである。速さよりも「深さ」へ、競争よりも「共生」へ、拡大よりも「熟成」へと変化する、老いの価値を改めて考える機会となることを期待する。

(小泉博明)